天智天皇
秋の田の
かりほの
とまを
あらみ
わが衣は
露にぬれつゝ

持統天皇
春もすぎて夏きたるらし
白たへの衣ほすてふ
あまのかぐ山

柿本人麿
うつびきの
山どりの
おのがしだり尾
なりぬれば
ひとりかもねん

山遊素人
學のうちらは
いでこれバ
まるだの
ゆかた
ゆづの高履
ゆき
ゆきもてふりつる

中納言家持

かすさざんな
ひとさせる
しの
ゆくもの
白きを見
和ぞぬれける

安倍仲麿
あまの
天のはらふりさけ
みまほしや
かも
春日なる
三笠の山に
いでし月かも

赤樓法師
ぐ覺は
み屋さの
なつみ
きり
すむ
世をうち山
人をうらふなり

小野小町

花の色は
うつりにけりな
いたづらに
わが身よにふる
ながめせしまに

蟬丸
あふさかの せき
あふみ
わかれて
ゆくも
かへるも
このよ

奏議堂
和田のまら
やれーなー
うけてこ
こぎ出ね
人をも
つげよ
あまのつりふね

僧正遍昭
天つかぜ
雲のかよ
ひぢ
をとめ
の姿
しばしとどめん

陽成院
はるばるきぬるの
みなれ
ゆくすえまつやまの
ゆきのしたみず
くるしきものは
こいてのみ
ふるさとさとぬる

河鳥龍大臣
みちのくに
まつぶちぶ
きる
なまゆ
みだれ
とまりなら

光孝天皇
君がため
春の野に
出でて
若菜つむ
わが衣手に
雪は降りつつ

中納言行平
なごりれば
ばの
山の峰なる
まつとしきけば
今ぞ帰る

庄屋業平
朝臣
千早ふる
神代も
きかずた
つた川
からくれなゐに
水くくるとは

人あるべくらん

なにはづ
みをつくし
あしの
ゆめのまも
あはでこの
よをすぐしてや
てんとうやう

元良親王
こびぬまでも
いまはなを
みたにまも
あるとうて
あるんとてもおもふ

素性法師
今はとて
月の
なのあけの
月をまちいづるかな

文盛豪秀
ゆうしゅう
ゆうしゅう
ゆうしゅう
ゆうしゅう

大江子重
見みまば
ちいさい
あなものの
ひとつの
はるもあらん

菅家
このたびは
ぬさもとりあへず
たむけ山
紅葉の
神のまに
まに

三條右大臣
名は
おさだ
あつ坂山の
さかのづら
人まつらむ
とは

頼信公
蔵山
みなのもとはいろあらばまたしのみ面きすてん

中納言家持

みちのくに
こきてかりする
ぶ〜ぶ〜
ぞみきとて
ひ〜ひ〜
ちろちろ

源宝行新日
山ぶくはるの
ぞ
きりすてり
くもも
ひまんとあるべし

九河内朝恒
きろあてこ
おらばや
きらぬ
やもの
ものまでハせる
もらぎてくの

坂上是則

ほのぼのと
あけぬるかたの
しらぎくの
はなとみるまで
あかれるゆきか

春道列樹

山川に風のかけたるしがらみは
流れもあへぬ紅葉なりけり

知友則

ひさぐの
ひらり
のぞけき
まの白は
まづ心なるく
花のちるまん

菅原興風
わたのはらこぎいでぬと人にはつげよ
あまのつりぶね

紀貫之

人をゝそこそろも
きらず
ふるさとは
てなじみの
もゝの
なる
にはひとり

清原深養父

ちるの
秋を
ぶさら
なれども
明ぬるは
雪のしらぬる
月やどるらん

文盛肖像
そら高く見の
ゆく秋の野を
つらぬきとめぬ
玉ぞちりける

右近
ときすらるる
身をばあるとぞ
ちかひて
人のいのちの
あるもあるらん

平兼盛
恋すてふわが名はまだき立ちぬべし
人しれずこそ思ひそめしか

千生恵見
越すとふ
とぶの名を
ゆだきの
なりけり
人をまどはす
おもひあり

清原元輔

ちぎりおきかさやに袖をしぼりつつ
末の松山なみこさじとは

中納言敦忠

あふこと遠くなりぬるのちの

こころもとなさぶれば

むかしをものもおもはざりけり

中納言家忠
あるときのたまへる
ものくるるも
あらくよ
人をも
ものいはず
らんみざらん

謙徳公

あまれども

ふぐきんを

おもはんと

家のつづらを

なりぬべきかな

曽我好恩
ゆるす
ゆるす
ゆるす
高のみちとも

東雲法師

八百ひぐら

寺ぐまの

やどの

さびしさに

人こそみえね

秋は来ぬ

源重之
風をいたみ
いわうつ
かみの
おのれの
くだけて
もものも
おもふこころか

大中医能宣郭医
御かきもの
衛士
のたく
ゆえに
松はもえて
ひろはきえて
ものをこそおも

藤原義孝

君がため
惜しからざりし
命さへ
長くもがなと
思ひけるかな

後京宮方朝臣
かくとだに
えやはかきの
さしも草
さぞもこしらん
ものゆゑ思へば

藤原道信朝臣
明けぬれば
くるるものとは
知りながら
なほうらめしき
朝ぼらけかな

西大將
道酒母
つゞけてひとり
ぬる枕
おくるまい
いろまみす
ものゝ
ゆめ

俵同
高女
わたれよの
行き人で
かつ行れど
りをあらの
いのちとも
うけ

わすれ

かた

けぶ

命

大納言公任
湖のなかに
たゝ
ゆき
名を
あらはして
ゆくえまでくれ

たきの音は
たへて
久しくなりぬれど
名こそながれて
なほきこえけり

和泉式部
あらざらん
この世のほかのなごりに
まちいでたるかな

大貳三位
有馬山
いなのさ
ゆふぢ
ぬるよ
人を
ゆめ
やうれ

あり寺山

雲のさくはなり

春ふけて

花をなつ

人をはなれやは

する

武部勇
大忠
そのく
みちハ
まつ
しさぶ
ハ
人
あるのさー
立

侍部屋
大補
ゆきの
ふるさの
みやこの
八重やくら
ふかき
ものひめうえん

清水紅言
枝をこるなら
ゆるすぞ

秋をこそ
とりのこすかねを
はるさめも

せゝに大阪のせきは
ゆるさじ

産婆
今ぞたこ
なれ
もの
人ぼで
なるらで
子よりも
うな

今はたゞ
おもひたえなんと
はかりをも
人のつらさは
いかなる
なさけ

推古紬
定板
あーとき

相模

三原院
ながらへも
あるべきものを
世をうしと
なにか
なかるべき
月の
ゑ

能因法師

あらしふく
みむろの山の
もみぢば
なかれて
川の
にしきなりけり

長屋はなの
さくらさま
屋を
はなれ
いでくる
なんすを
いぐらおろし
社のうぐれ

人間言經信
ゆるれば
ことの
ばの
ぶんぶ
ぶんぶ
ぶんぶ
おのまん
ぶんぶ
ぶんぶ

祐子
内親王京極
きてみすの
たゝしのもとの
あさぼらけ
月ゝや袖の
ぬれぬらんとは

青にさく
たかしのはなの
あつまみは
きりしやそてのの
めれまてそ
まれ

とやまの
かすみ
しづ

宮廻の花のへの
さくらさかりけり

とをまの笑みの
わゝむもの
あらなん

後百世茶後
ちすろ
おはし
させよ
つゆを
いのそうて
あまれこと
の
ものも
ものハ

法性寺入道
前関白大政大臣
和歌のうらは
さざ
波
よせくれば
くだけて
玉を散すまで
おもしろ
きかな

崇徳院

せをはやみ
いわうつる
たき
川の
われても
すえにあはむと
おもふ

あわじ島うらなみ
わたり
なくこゑに
いくよねざめの
せきもりぞ

待賢門院堀川
ちぎりおきしさらぬわかれのなごりをしけふこそなけれ

後鳥羽院左大臣

ももしきや
ふるき
のきばの
しのぶにも
なほあまりある
むかしなりけり

不とゝまゝに
ながうる
あてを
ながめれば
たゝあり[illegible]の
月そのこれる

おもひ合

さてもなほ

命かぎりあるものに

うきにたえてあは

まほしきかな

きもすがら
ものおもふ
ころは
あけやらで
神やのそ表こへ
つれなかりけり

西行法師
なるほどと
月やあら
ぬのこと
ばかりは
くるしく
もあらじ
とぞのたまひける

なげきとて

月やはものを

おもはする

かこちがほなる

はがねみだれそ

寂蓮法師の
ちく両の
つゆも
きえぬ
槙の葉に
雪なきのこる
杉の村雨

皇太后
門院列百
なにはえの
あしのかり
ねのひとよ
すがらつ
ゆもらぬ
袖のつゆかな

式子内親王

玉のをよ
たえなば
ながらへ
ばしのぶ
ることの
よわりもぞする

主の為よ
身を捨て
れば
なかるらば
しの多事の
あはりもぜすす

閻魔院
大補
ぬるとよみ
ぬるぬる
ぬるはちくらく

尺さばかりを
おしまん

あまの袖なれにも
あれてぬれし
色はかはらじ

きりしたす

ナイ和

シモ可ナサ之日ニ

夜かちしき

不ぬもあり

わがそでは
しほたれにけり
わたの原の
八しまもしらぬ
あまくすまをす

源倉坂大臣
世の中は
つねにもがな
なぎさこぐ
あまのおぶね
つなでかなしも

みよの時の
やまの
せ

前大信忠卷

おけけなく
うきまれ
たるかも
おけしるか
我なれ
ちゝ
まれ
ちゝの
そで

をへけるく
るこよの
れみれ
をるるあを
るかれつ
そをしし
きみそめのそで

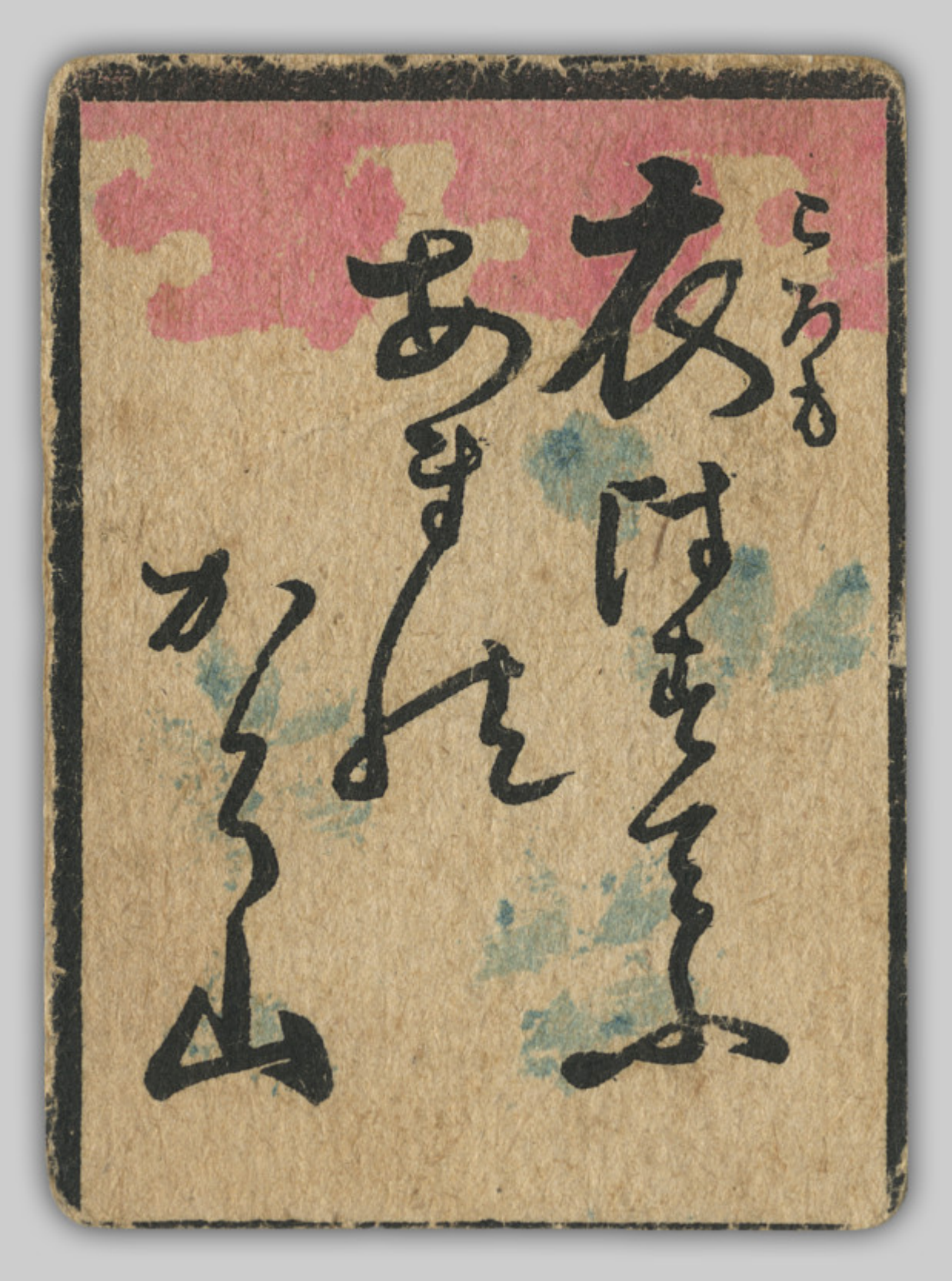
入道赤太郎
大臣

信濃殿院

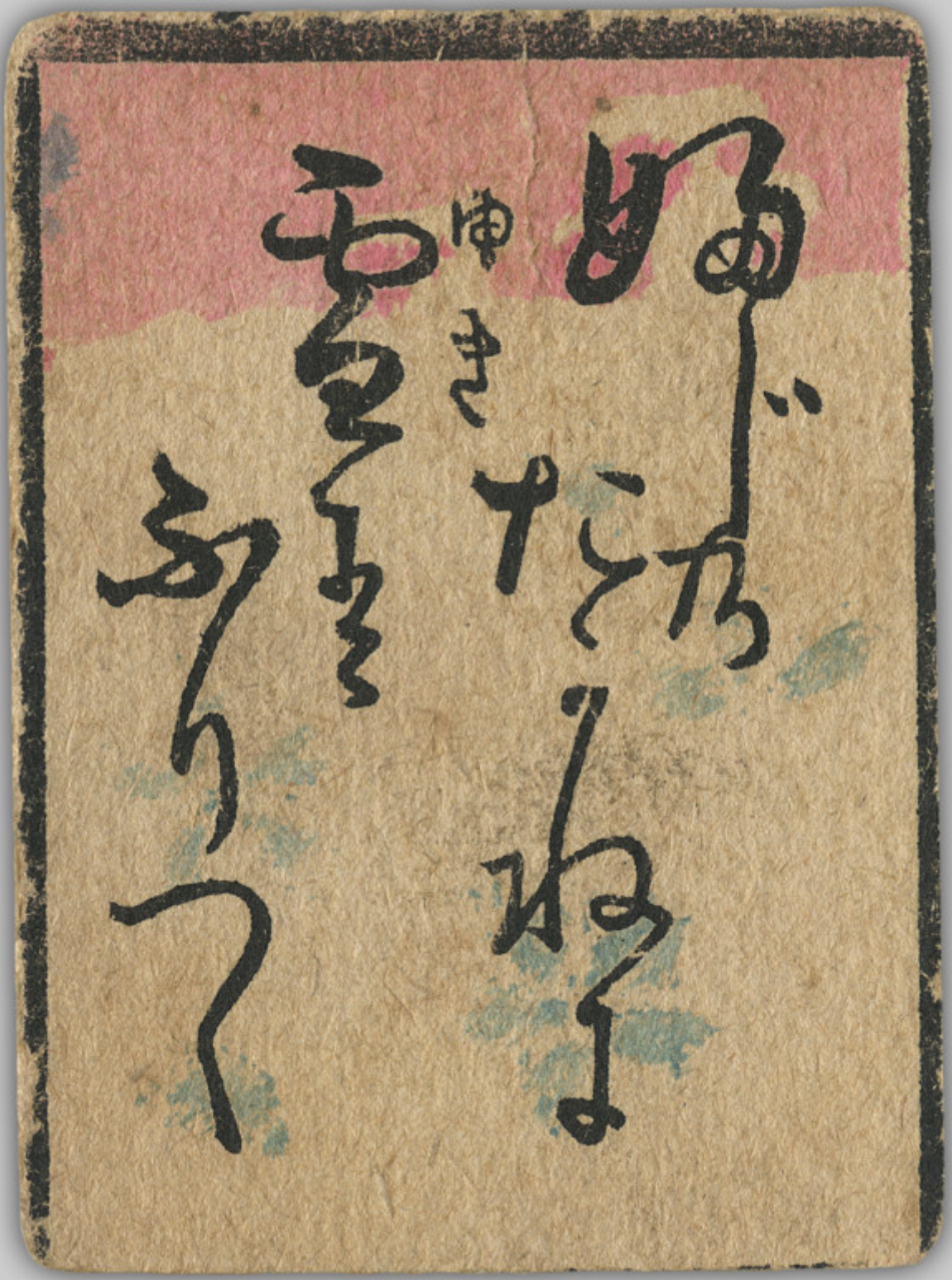
順德院

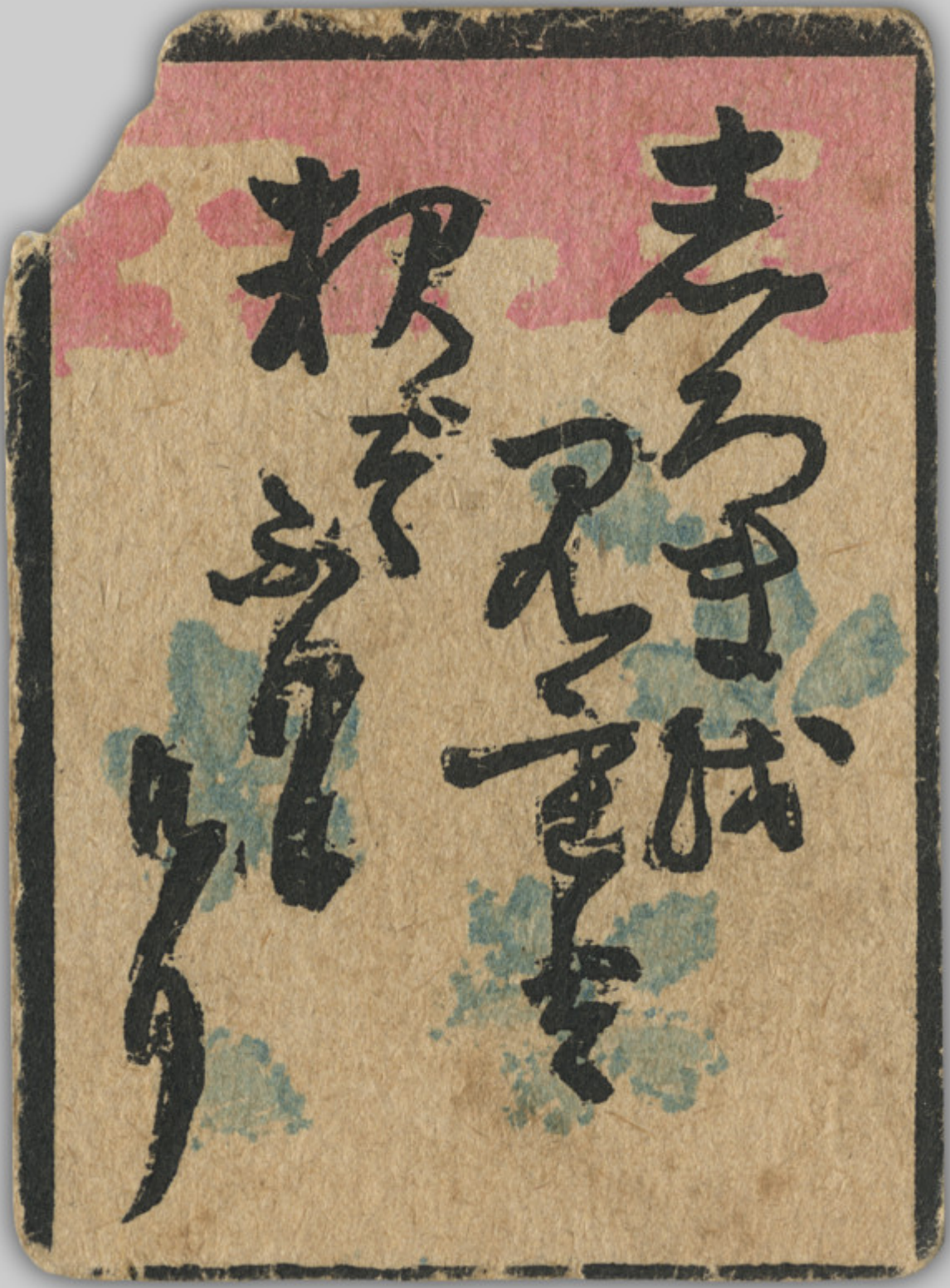
もゝしきや
ふるさとのきばの
しのぶかな
ちる
はまぐり
もゝのなりけり

わがの高砂で
つゆ
あるまそ
ぬれて

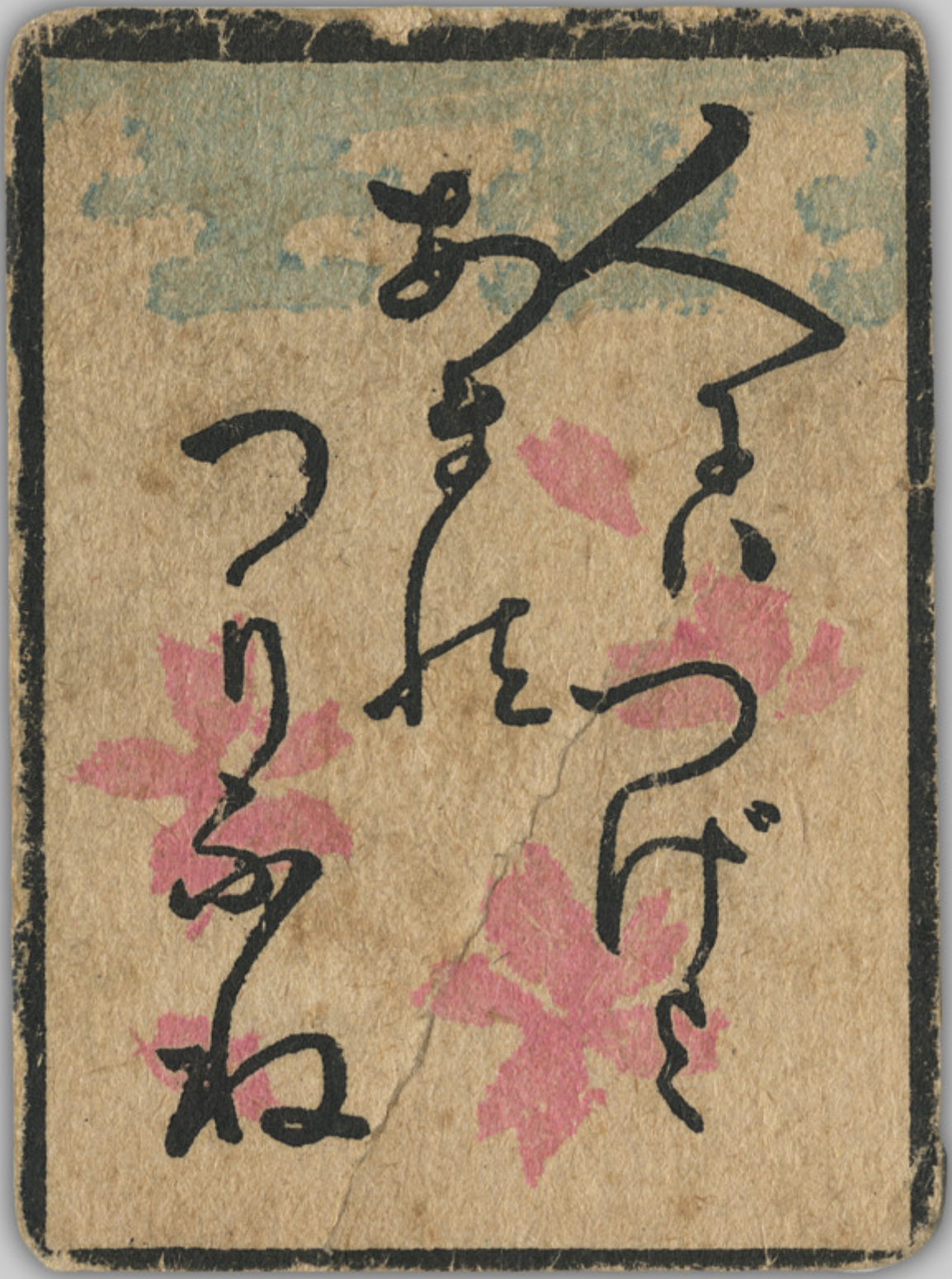


なもの
ひとり


ゆき

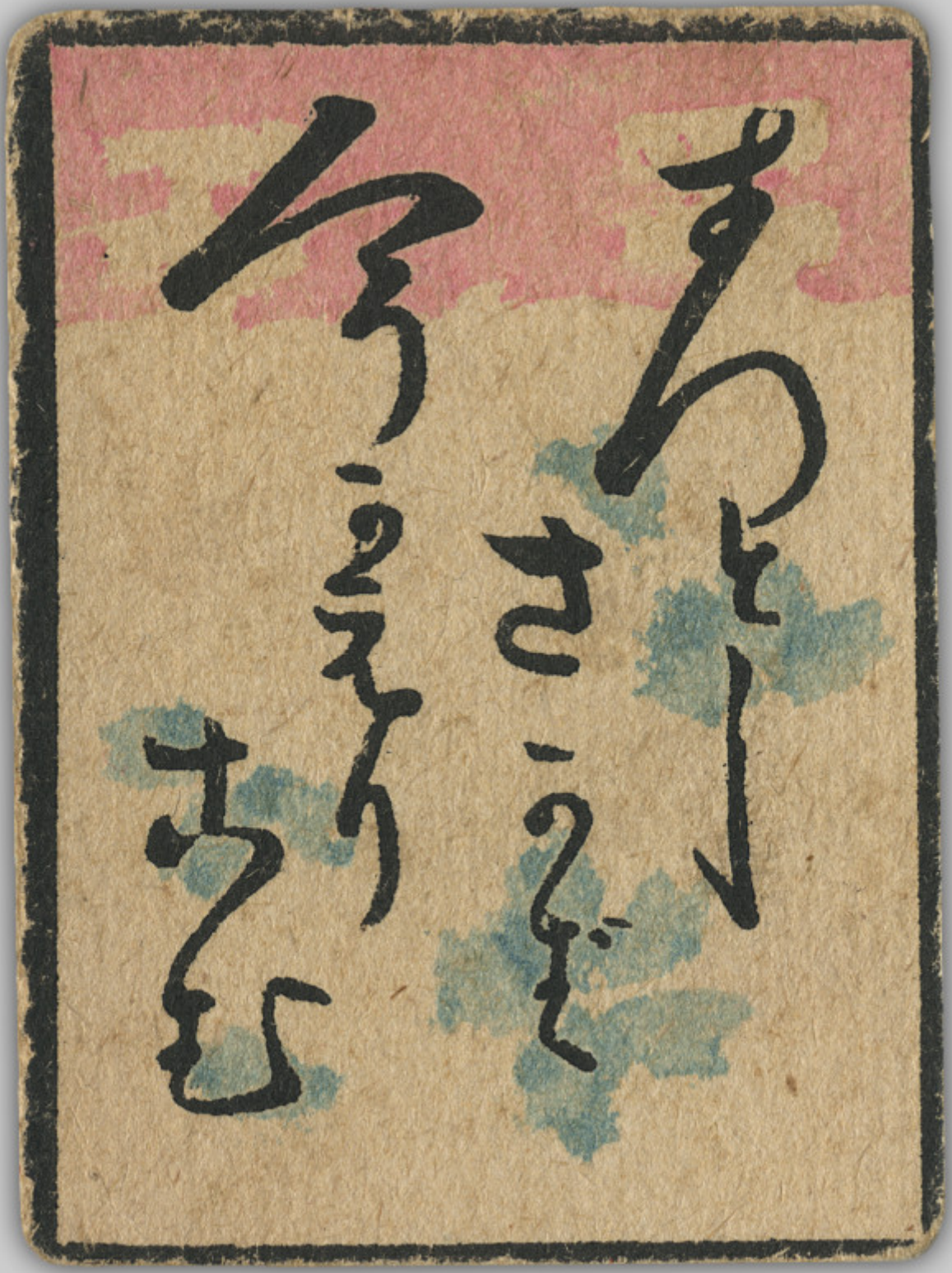


世陸家陸
山人
夢

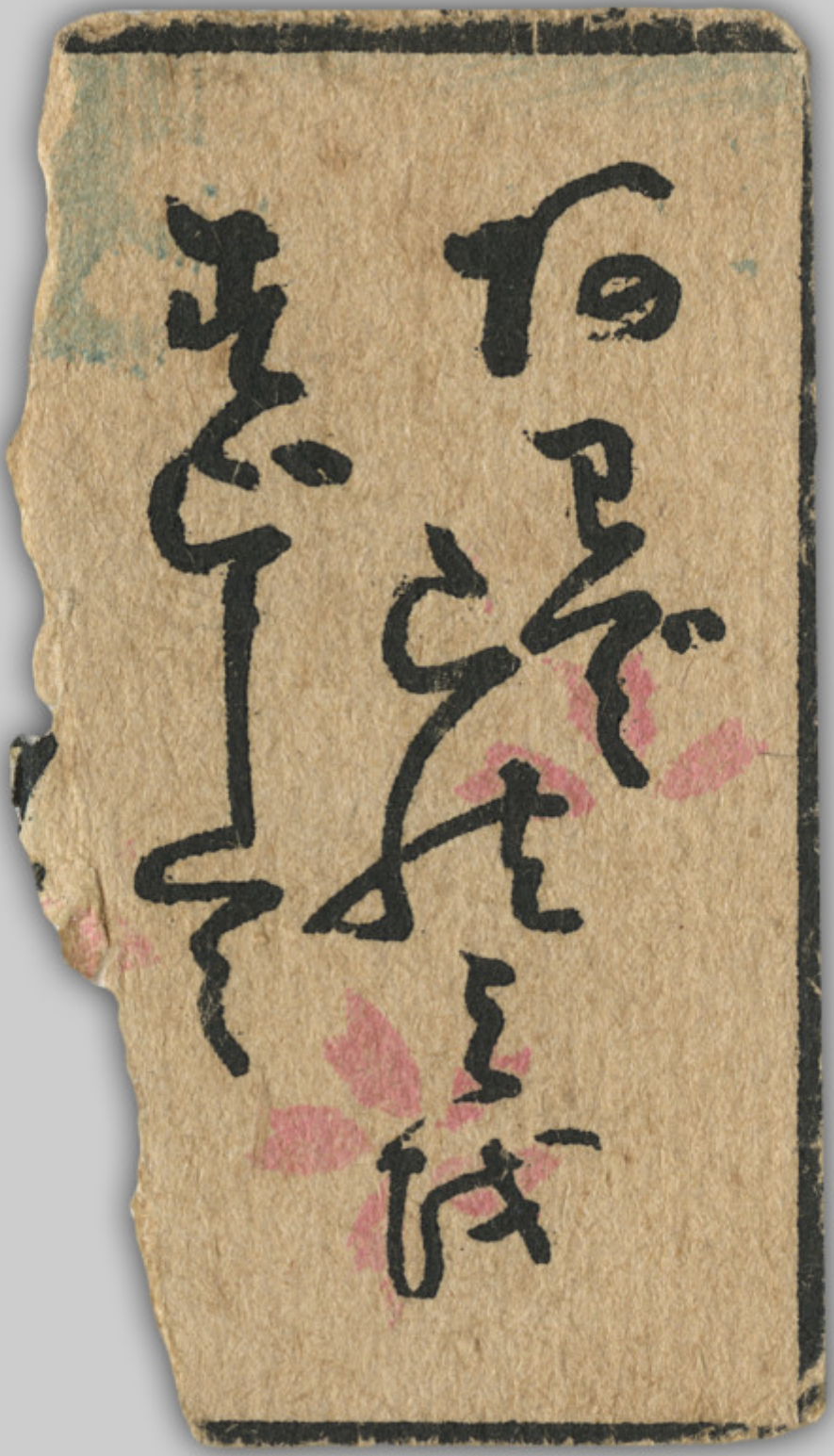

あきたつば
つりあね

あり
七夕の
夕ぐれ
ちと変る

みぞれ
なまぐも
月ぬ
なまぐも


あらしさえ
今こそ
吉野

四光のあがり



有明の
月
ありあけ
はな
まちしぐるれ

ゆが身一つの
秋にはあらねど

あまぢの
神のまつり

人

ながらへば
またこのごろや
しのばれん

ゆうみきよてのあるうらん

人のもてるものを
かまんとおもふ
ものは一ぢ

あまぎまどふ
世の人
さらぬ
くるる
花

のの
つきぶり
うきもの
ゆめ

ちゑのさとなるあらら書

ゆき

なるかみも
あえぬ
ものゆえ
なるらんと

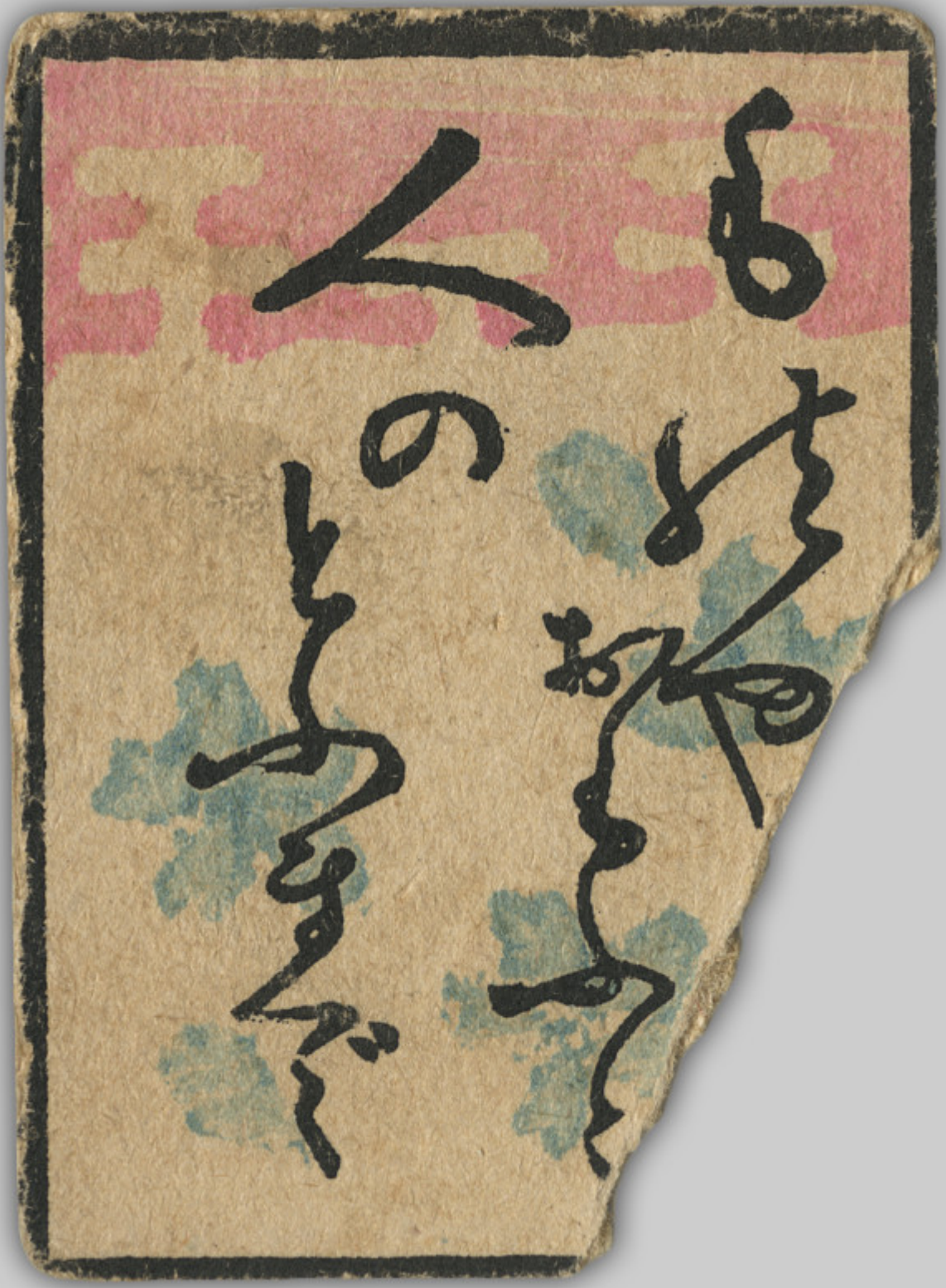
老ぢ花のちるもなさ

松島の友達あつまる

雲
間
月

人のいのちは
おもくもあるなり

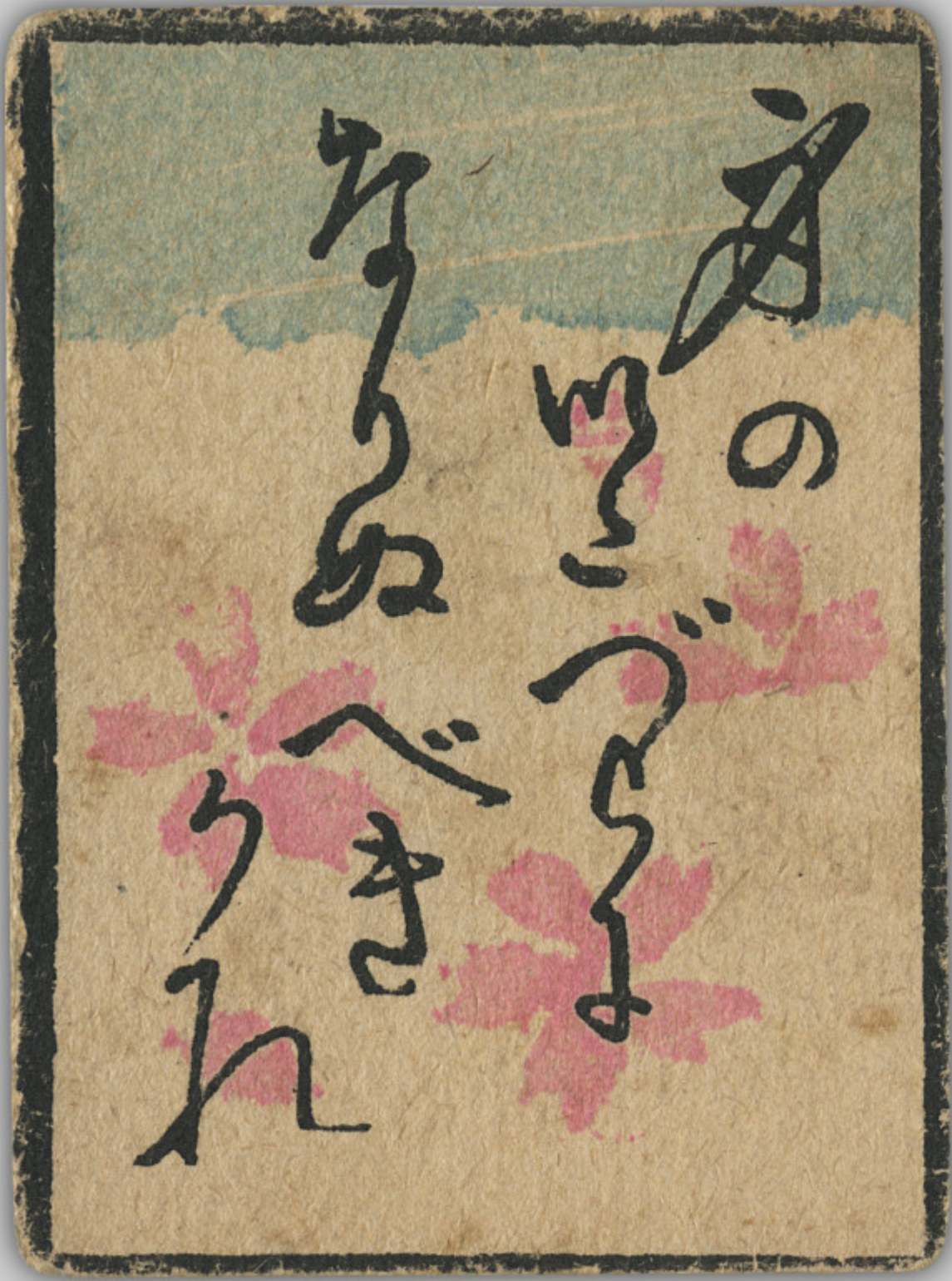
なのりそ
みなどの
人の
いとま



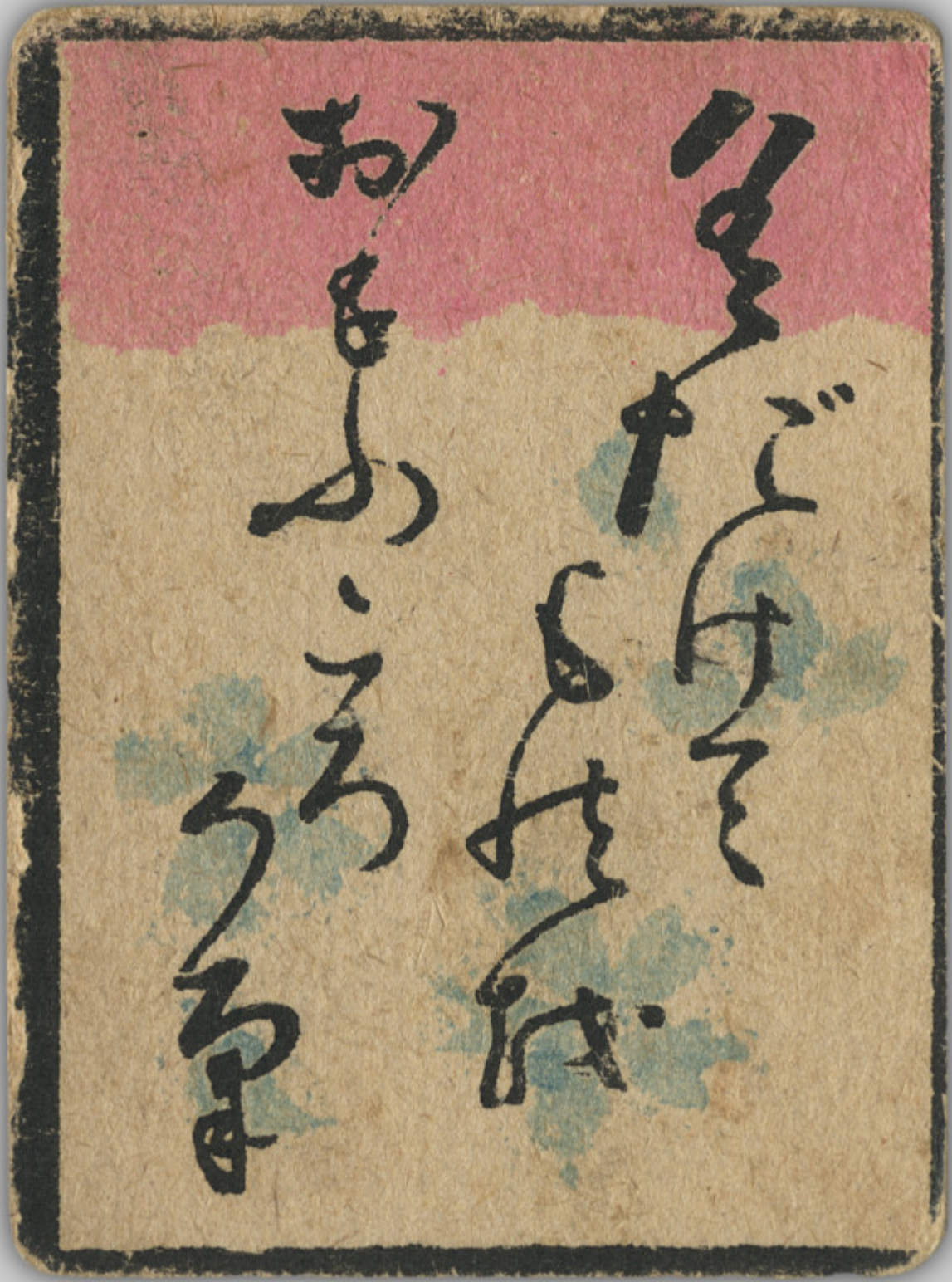
すがの
ねの
なみ
さくら

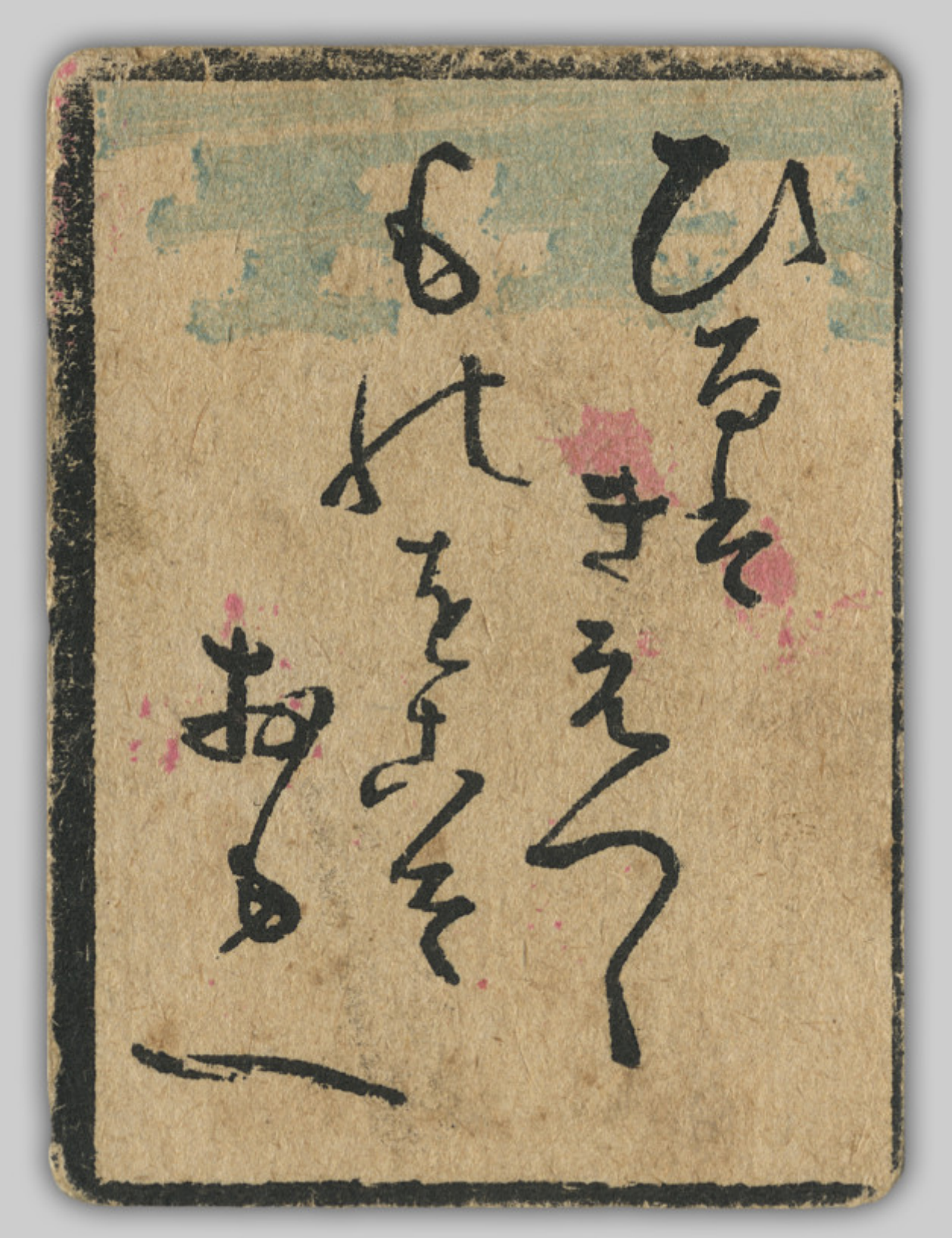
人の縁も時も
うつりゆくさらなり

人をまもるをも
うらみざらまし


春の
雪づらは
なりあべきうれ

申さえる
きらぬ
春の
みち
ちかく





十五夜
四方の月
見物

ゆきとけて
むらくもはれる
あまのはら

雪月花の春夏秋冬

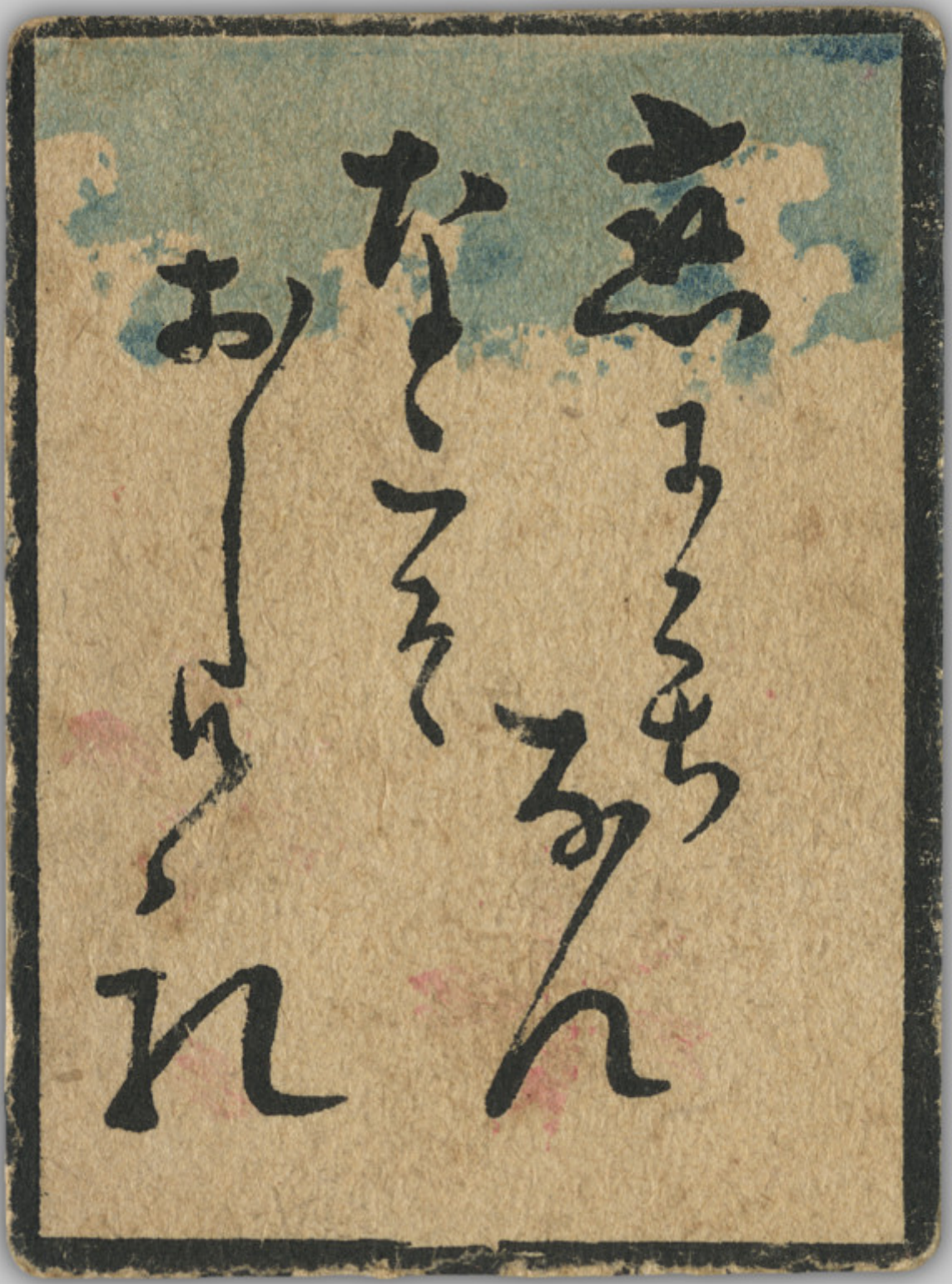
かぐやまで
月
はなし
ものがたり

夕顔の歌

夕顔の巻

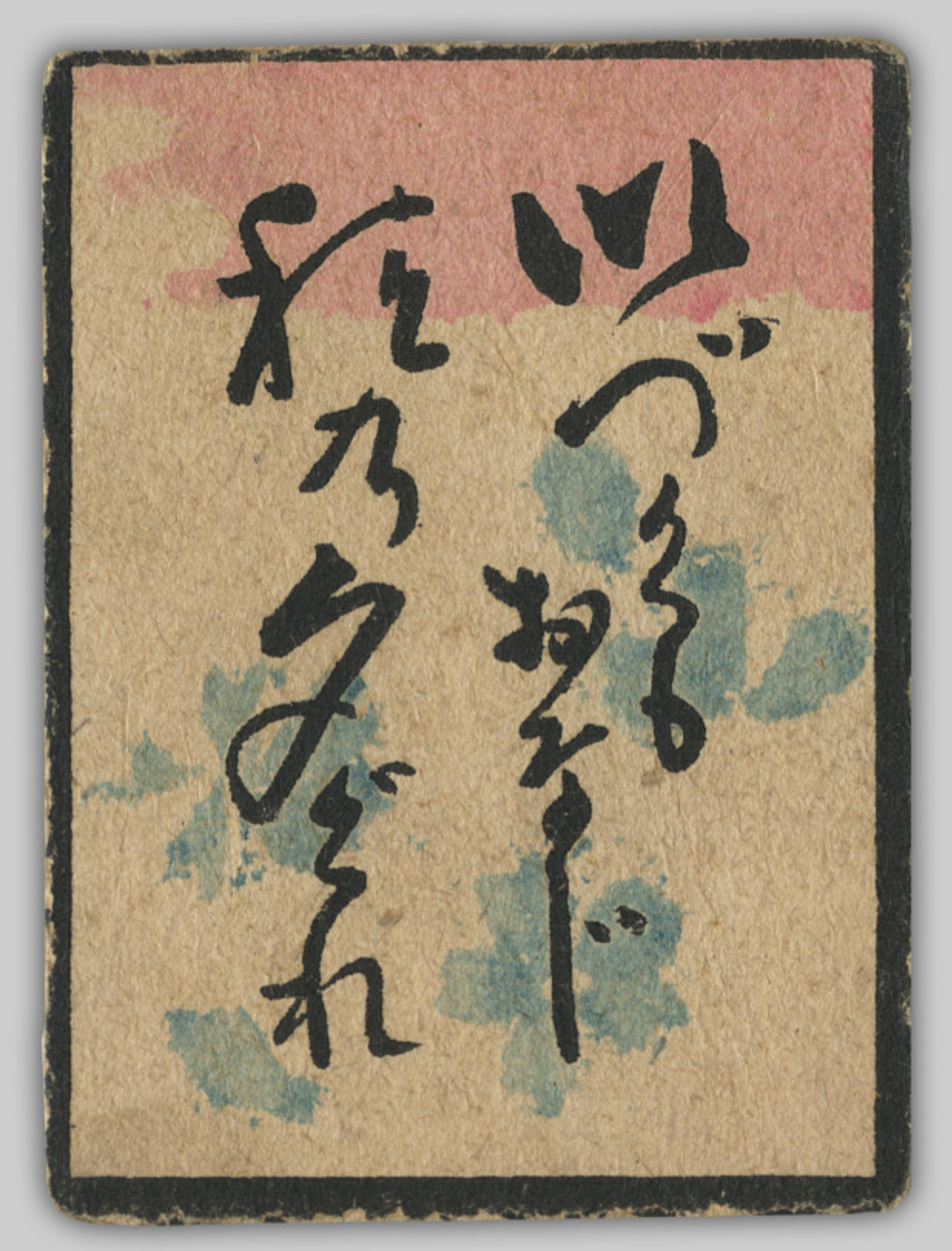
今宵は
なぐさむ
月も
うれしな

ゆらぎ
ぎをわ
のなか
あれ



花

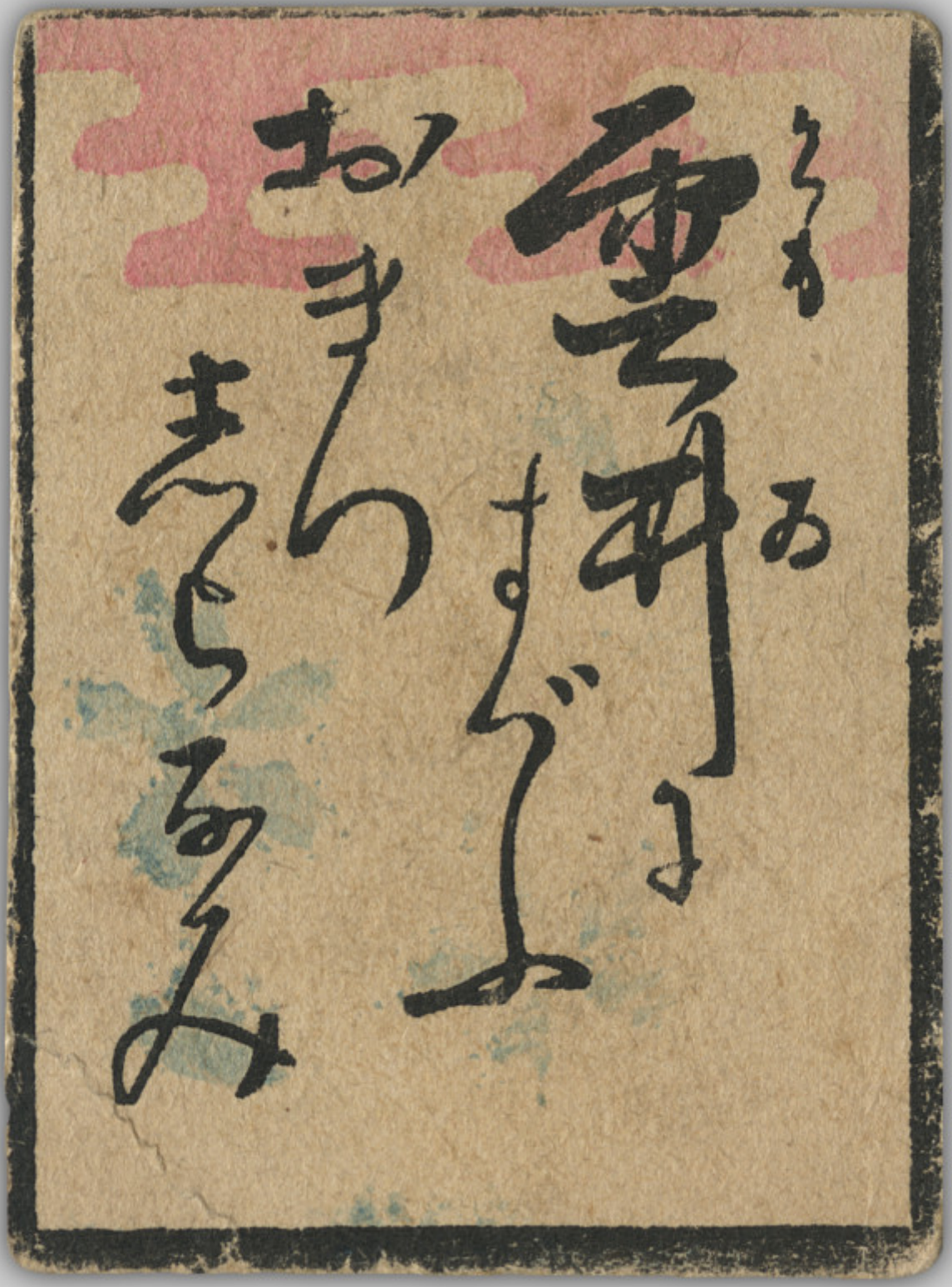
地獄極楽
閻魔帳

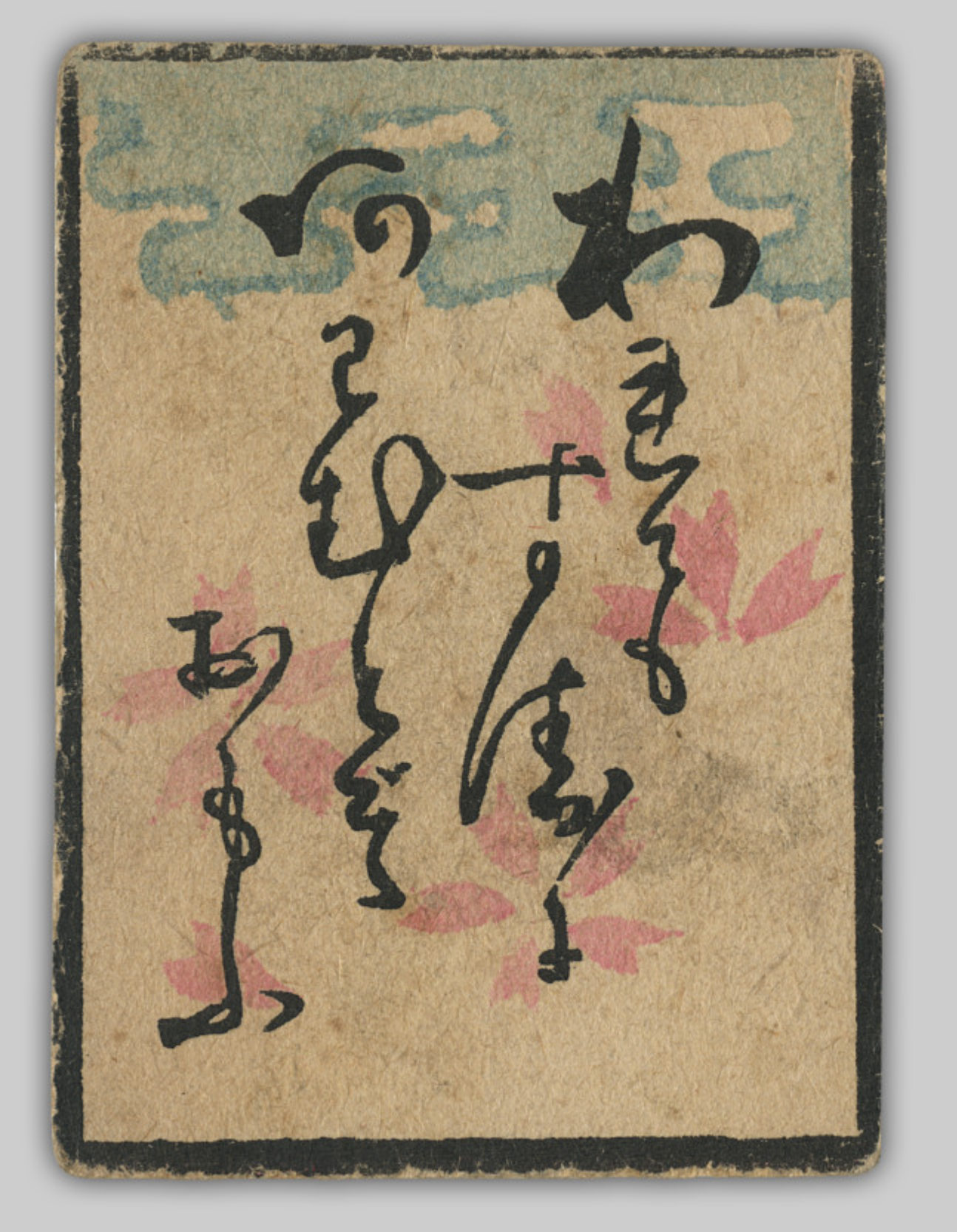


とやまたに
かすみたなび
くはるの
あらしに

春の雨
降らぬ
うちに

あきはぎの
はなのにしき
をり





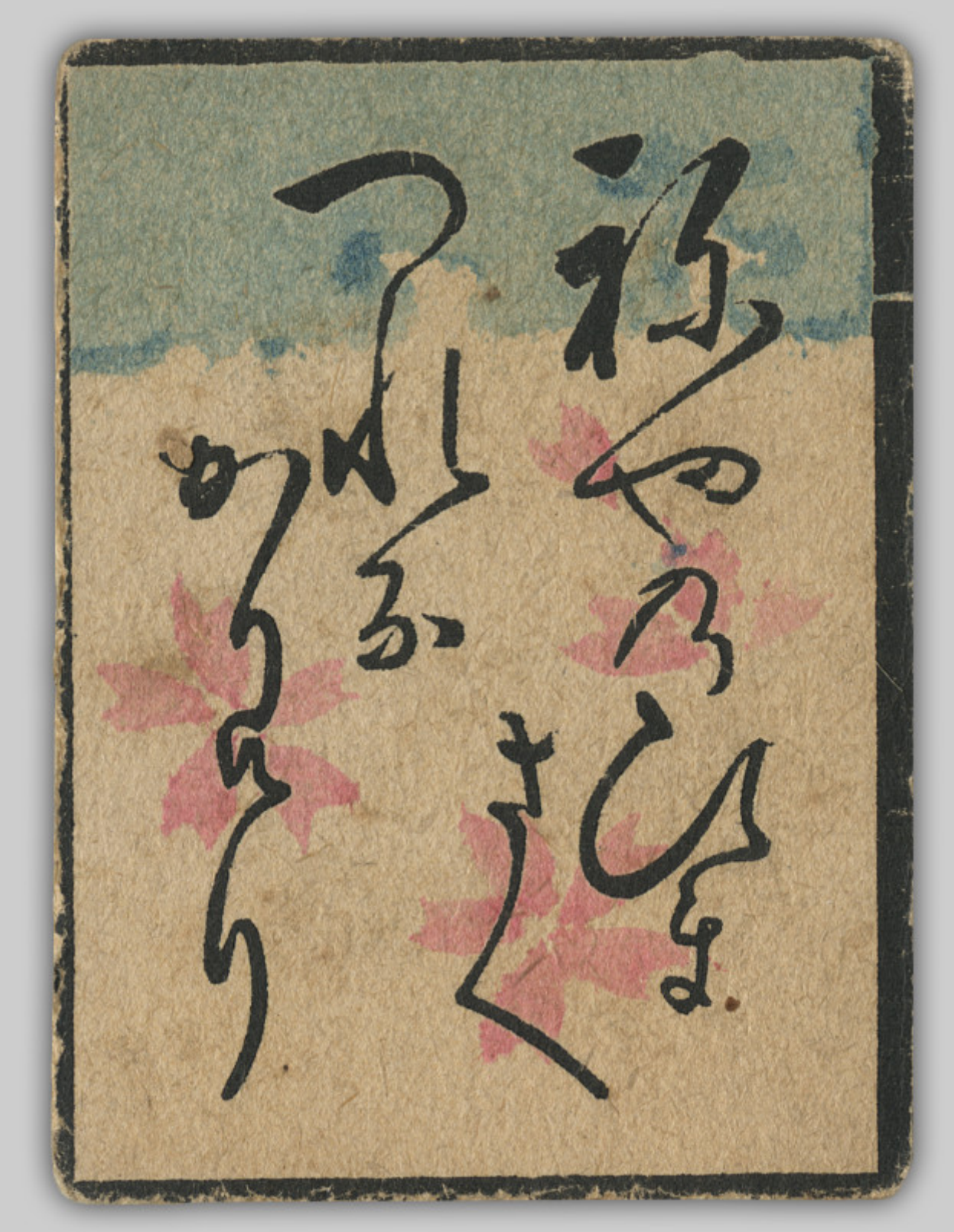
世界
袖屋
乃
すはの

[illegible]

たかの
ちよ
明日
のこと

うきまま
あえなめを
ちみぶ
なりりし

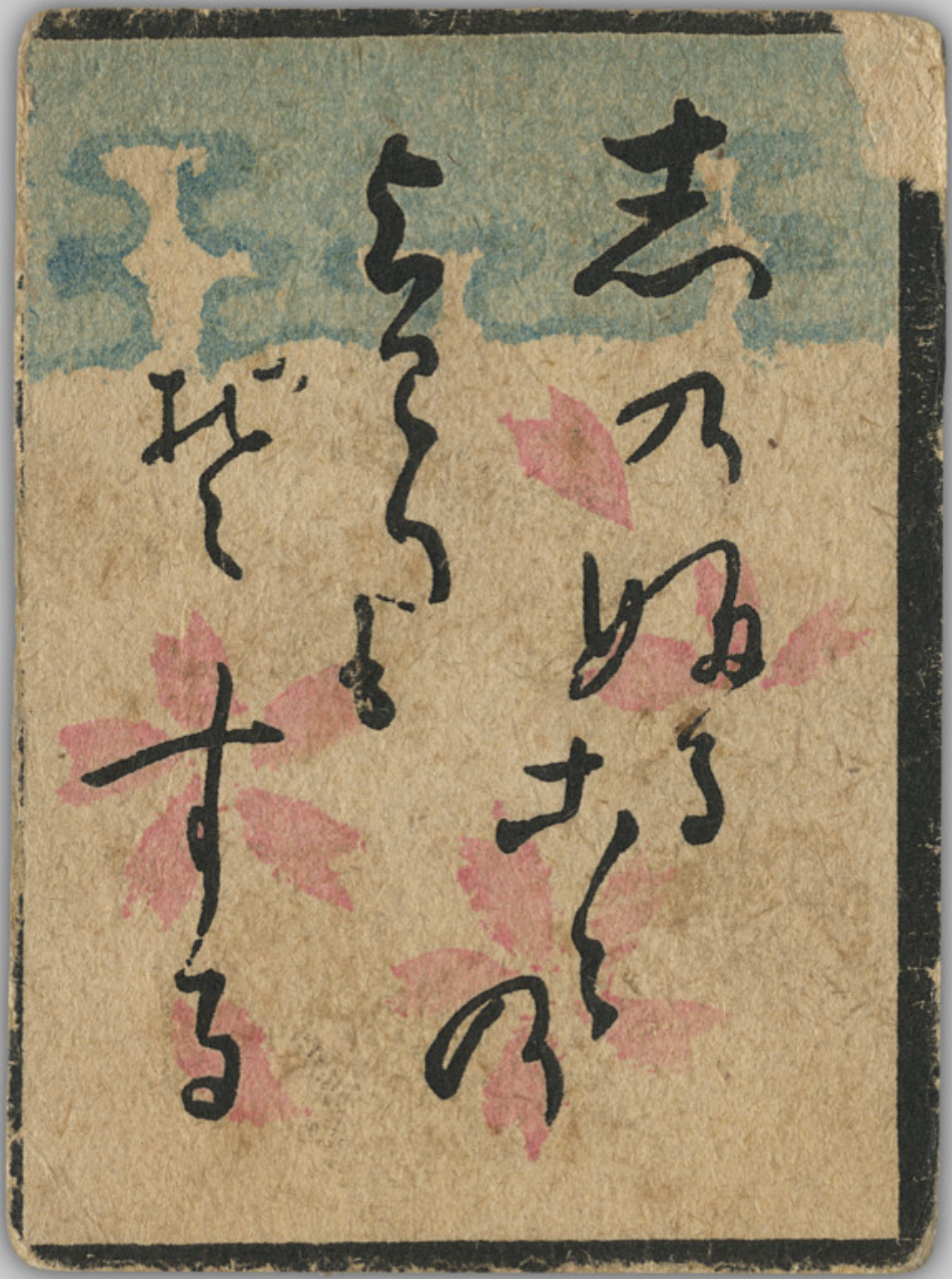
山乃端
月
まつの葉
なるらん

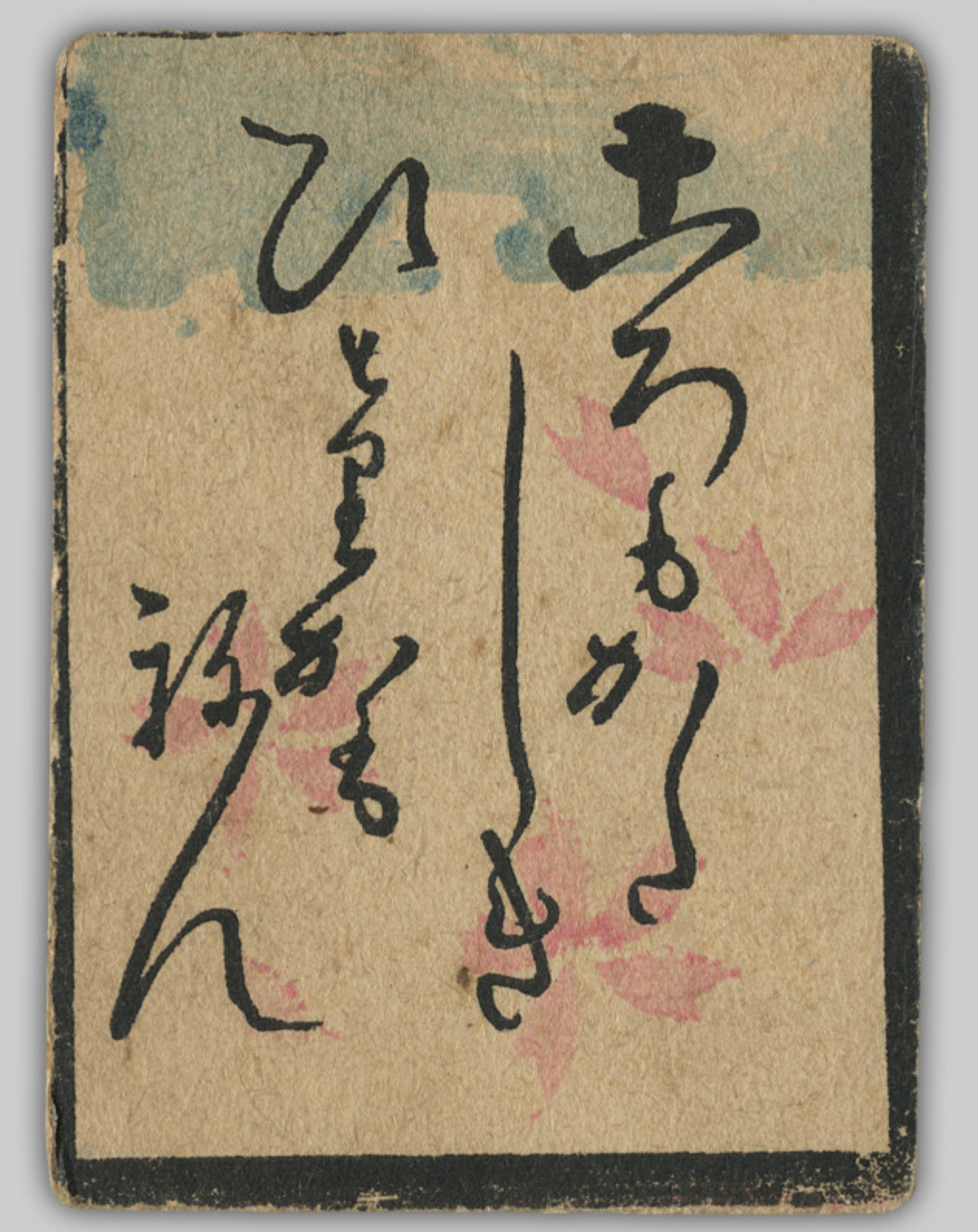


かしらの
ゝまきわの
ぞくの事

きりぎりすの
ぼる秋の
夕ぐれ

みるめ
なこそ

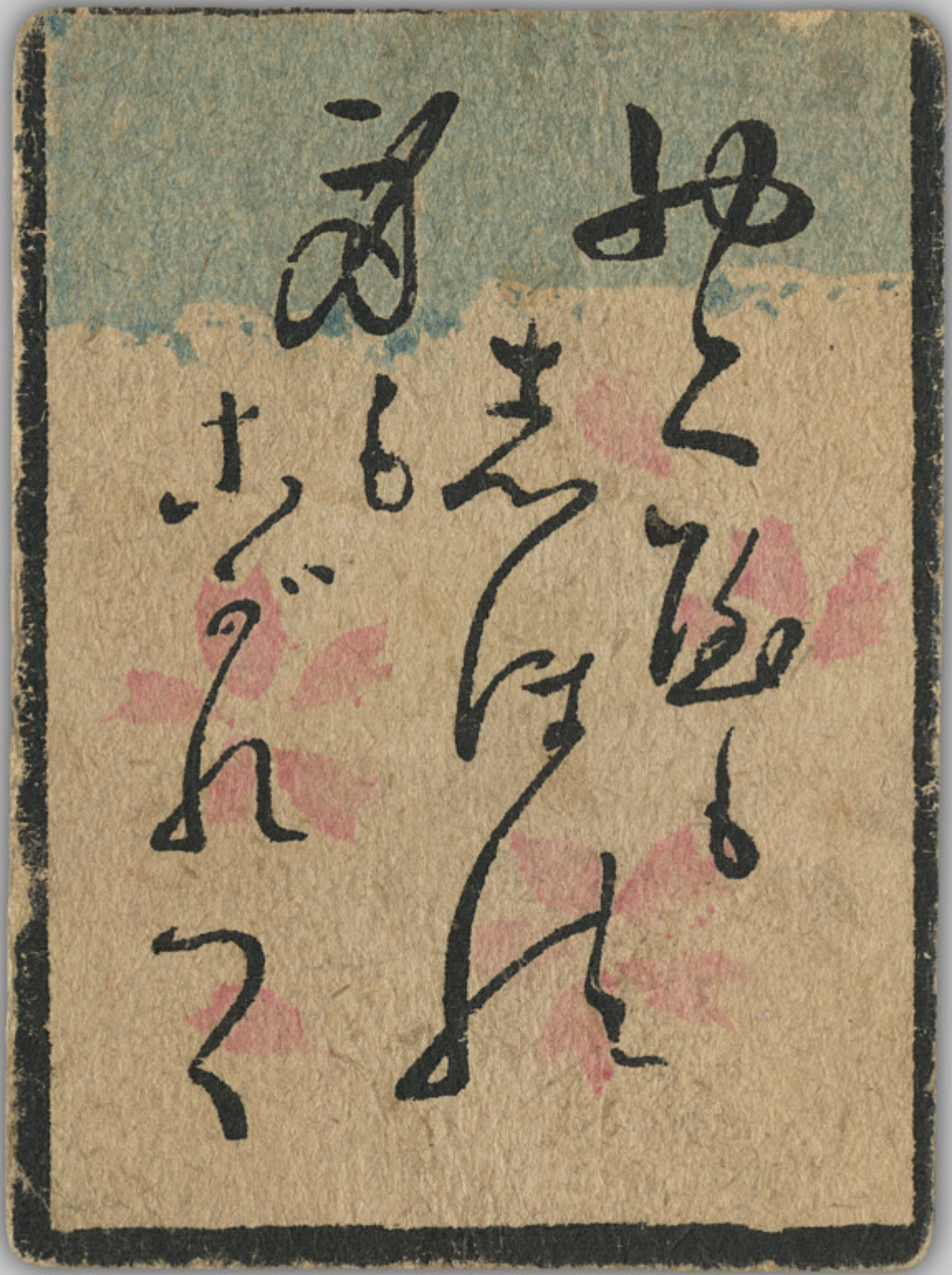

春の如月
ちらちら
ぬ
すき



おぶね
まつ人の
おぶねの
つなぎ
かなすも

わかるる
春の
はなぞ

わ



みたぎれて
ゐるの
きもちよさうな

明治あまの星
あるまぶり
ものがたり